

表1 口腔領域に及ぼす態癖の影響

・ 歯軸の傾斜	・ プラキシズム	・ 歯周病の増悪
・ 歯列の変形	・ 体のねじれ(全身のバランスを崩す)	・ 咬合面形態の増悪
・ 咬合平面の非対称	・ 気道の狭窄	・ 義歯の破損
・ 顎位の変位	・ 歯の動揺	・ 義歯による粘膜の潰瘍
・ 顔面のよじれ	・ 歯肉退縮	
・ 顎関節症	・ 薄い歯肉	

口腔内模型からみる態癖による歯列の変化

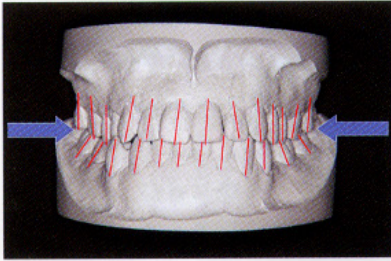


図10-a 外からの種々の力によってアーチを変形させ、歯軸を傾けさせる。

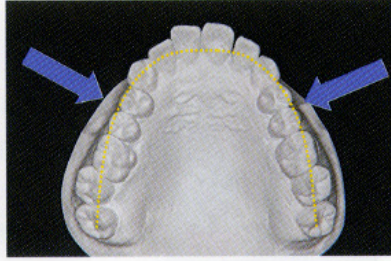


図10-b 本来U字型であるべきアーチが前突し、V字型になっている。6 5 4 | 4 5 6 を押さえこむ力がかかっている。右の方が強い。横から押されてアーチがV字型になると、下口唇を噛む癖が始まる。



図10-c 左右からのアーチの狭窄。歯軸が左になびいており、6 5の舌側傾斜も大きく、右からの態癖の方が時間が長いかもしれない。

実際の態癖



図11-a 左頬杖。特に、パソコン使用时。



図11-b 左下寝。アーチを狭くし、右側の顎関節を押し込む。



図11-c 左右頬杖。バイトを深くし、左右関節を後上方に押し込み、アーチを狭くする。



図11-d 右うつぶせ寝。右アーチを狭くし、フラット化する。左側の顎関節を押し込む。

態癖のみつけ方とその対応

ここまでで態癖がどのようなもので、いかに顎口腔領域に影響を及ぼしているのかがわかったと思います。続いては、実際の症例をみながらその対応をみていきます。

1 態癖のサインを捉える

体にとって良くない力の1つである態癖を除くと、生態は治療力により体をねじり、変形させられていた部分が元に戻ろうとする働